

中上級日本語教科書における口頭表現活動 -総合教科書を中心として-

著者	岡部 悦子
雑誌名	長崎外大論叢
号	8
ページ	37-48
発行年	2004-12-30
URL	http://id.nii.ac.jp/1165/00000222/



中上級日本語教科書における口頭表現活動 —総合教科書を中心として—

岡部 悦子

要 旨

本稿では、中上級日本語学習者に対する、効果的な口頭表現能力の指導方法を考えるための基礎的な研究として、主要な中上級日本語教科書10冊における口頭表現活動の分析を行った。

その結果、口頭表現活動の種類については、①「説明する」、「意見を述べる」、「話し合う」という自由選択練習については全教科書で共通して採用されているが、②「発表・スピーチ」といった一定の談話形式を学ぶ活動や、「ロールプレイ」、「アンケート」、「インタビュー」といった、コミュニケーション形式の活動は教科書によって採用に差がみられることがわかった。

このことから中上級レベルの日本語教科書では、概ねどの教科書の学習活動を通じても一般的に「説明する」、「意見を述べる」という学習機会はあるものの、発表やスピーチといった一定の談話形式や、他者を想定した実質的なコミュニケーション活動については、教科書によって学習機会に差があることを指摘するとともに、学習者の学習目標に応じて適切な教材を選ぶことの必要性について論じた。

Synopsis

In this article, the oral communication exercises in ten major upper intermediate Japanese language textbooks were considered to investigate successful instruction techniques to improve oral presentation abilities in upper intermediate Japanese language learners.

There are two main observations: (1) All the texts employ the following independent practice activities; explain, state your opinion, class-discussion.(2) However when it comes to Speech, Role-play, survey, interview, and other Communicative activities, there was a drastic difference between the ways the activities were deployed between the textbooks.

Based on this observation, although all the texts offer the general chance to explain, state your opinion, depending on the Japanese language textbook there is a clear gap in the opportunity to practice Speech, survey, Role-play, Interview, and other realistic Communicative activities with another person. Therefore, it is argued strongly that it is essential for instructors to base their selection of class materials carefully on the students' learning objectives.

1. はじめに

「日本語がペラペラになりたい」「上手に話せるようになりたい」——長崎外国語大学(以下、「本学」と表記する)の日本語クラスでニーズ調査¹⁾を行うと、「読むこと」・「書くこと」・「聞くこと」・「話すこと」の四技能のうち、最も学生の関心が高いのが「話すこと」である。大学での授業のほか、日常生活、友達づきあい、アルバイトをするために、「話すこと」、すなわち口頭表現能力は欠かせない。現在の学生のニーズに応えるために、また将来の就職・進学といった学生の進路選択のために、より高い口頭表現能力を育成するためにはどのような指導の可能性があるのか、本学日本語日本文化コースでは現在鋭意検討中のところである。

では、本学の日本語クラスを履修している外国人学生の日本語口頭表現能力はどの程度のものであろうか。本学の2004年度外国人入試募集要項によれば、受験資格は「日本語能力試験1級を受験していること」、または「日本留学試験を受験していること」となっている。日本語能力試験の1級の認定基準は、900時間以上の学習時間を経て、漢字2000字程度、語彙10000語程度の理解ができる程度とされており、1級合格は日本語力が上級レベルに達していると考えられる1つの手掛かりとなっている。たしかに、1級の読解試験問題を例にあげれば、その問題は新聞、新書、エッセイ等から出題されており、これらが理解できるならば、読解能力について相当の日本語力があるという見方ができよう。では口頭表現能力はどうであろうか。残念ながら、日本語能力試験には口頭表現能力を問う試験が現在のところないため、その実力については判断することができない。

日本語学習者の口頭表現能力を測定する方法の1つに、ACTFL (The American Council on the Teaching of Foreign Languages ;

アメリカ外国語教育協会) のOPI (Oral Proficiency Interview) がある。OPIは、テスターと受験者が1対1で30分程度面接する形式の口頭表現能力試験であり、その結果を初級・中級・上級・超級の4つのレベルで判定する。初級から上級の3つのレベルについては、「初級の上/中/下」のようにさらに3つのサブレベルに分けて判定する。2004年度春学期に本学の「日本語2クラス」で日本語OPIを実施したところ、学習者の日本語レベルは中級の中から上級の上に分布し、24名学習者のうち上級が9名、中級が15名であった。ACTFL-日本語OPIにおける中級レベルは「自分なりに言語が使える、よく知っている話題について簡単な質問をしたり答えたりできる。単純な状況や、やりとりに対処できる」、上級レベルは「主な時制/アスペクトを使って叙述、描写できる。複雑な状況に対応できる」、と考えられている²⁾。「日本語2クラス」は、能力別に6段階に編成している日本語クラスの上から2番目のクラスであるが、口頭表現能力が上級レベルに達している学生はまだ少なく、「単純な状況や、やりとりに対処できる」ものの、「複雑な状況に対応できる」までには至っておらず、ニーズ調査の結果も合わせて考えると自分の言いたいことを十分に表現できないもどかしさを抱えているものと推測される。「日本語2クラス」に続く「日本語3クラス」から「日本語6クラス」の学生は、なおさらであろう。

もちろん日本語学習の目標は、口頭表現能力の育成に限らず、読解・聴解・作文など他の技能の育成も重要な課題である。各技能のバランスを考えてコースデザインを考えるにあたり、そのコースでどのような教科書を採用するかということはコースの運営上重要な問題である。本稿では、特に本学の学生に多く存在する中上級日本語学習者への教育を念頭におき、その効果的な口頭表現能力の指導方法を考えるための

基礎的な研究として、主要な中上級日本語教科書における口頭表現活動を分析することを目的とする。

2. 教材分析の先行研究

言語教育教材は、その言語習得の環境支援の一分野であるが、教育方法の変化に伴い様々な教材が開発されている(河原崎1997)。日本語教科書について、『日本語教育』59号では、「教科書の問題—理想と現実—」という特集が生まれ、教室作業・音声教育・文字教育・文型の扱いなど様々な観点から日本語教育全体における教科書の意義が議論された。また1980年代後半までの理論をまとめたものに岡崎(1989)、1990年代前半までの主要な日本語教材の構成・特色使用法の分析を行ったものに河原崎ほか(1992)がある。

1990年代後半は、日本語教科書の構成から教科書の中で扱われている言語表現の分析に研究の中心が移り、ラオハブラナキット(1995)は「断り」表現、小野(1997)は情報提供場面の会話表現、ピッツコーニ(1998)は待遇表現について、いずれも初級教科書を対象に分析を行っている。日本語教科書の教材としての関心は、初級教科書には常に注がれているが、中級以降の教育段階では生教材が使用されることが多いためか、それらのレベルを対象とした教材を一定の基準で比較し教材の特性を検討することは、管見によれば河原崎ほか(1992)以来まとまったものは見られない。

木村(1982:1997)が、「中級は、いうまでもなく、初級修了の学習者を対象として、上級レベルの学習を可能ならしめる教育を行う段階である。したがって、中級という段階は、出発点は初級の修了時であるけれども、到達点は上級の出発点であるというわけである。初級は基礎的学習の段階であり、上級は学習を完成する段階であるから、両者をつなぐこの段階は、出

発点と到達点とのあいだに、かなり大きな落差があるのは当然である。この落差を埋めていくことが中級の学習である。」と述べているように、中級から上級までの間には多様なレベルの学習者が存在するため、クラスの運営上どの段階に焦点をあてるかは常に教師の頭を悩ませる問題である。多様な学習者の一人ひとりのニーズに対応するためにも、クラス全体にあった適切な教材選びのためにも、教師にとって様々な教材の特性を把握し、必要に応じて選択するために教材の情報を整理しておくことが求められている。教材分析には理論研究、文型・表現研究、文字教育、音声教育など各方面からの先行研究がみられるが、本稿では特に口頭表現能力育成を念頭に置いた学習活動に注目していくことにする。

3. 研究方法

3-1 分析の対象

本稿では、現在、大学の留学生教育や日本語学校で使用されている以下の主要な中級～上級レベルの内容をもち、「読む」・「書く」・「聞く」・「話す」の四技能の育成を目指した総合型日本語教科書10冊を分析の対象とした。教科書の選択にあたっては、本学の日本語クラスでの利用状況、九州各地の大学の日本語教育課程での利用状況³⁾、書店での販売状況⁴⁾などを考慮し、以下の10冊を選択した。

- (1) 『テーマ別 中級から学ぶ日本語(改訂版)』
荒井礼子、太田純子、亀田美保、木川和子、
桑原直子、長田龍典、松田浩志(1991;2003)
研究社
- (2) 『上級で学ぶ日本語』
阿部祐子、大藪直子、亀田美保、田口紀子、
長田龍典、古家淳、松田浩志(1994;2001)
研究社
- (3) 『文化中級日本語I』
文化外国語専門学校日本語課程著作・編集

- (1994 ; 2003)
- (4) 『文化中級日本語Ⅱ』
文化外国語専門学校日本語課程著作・編集
(1997 ; 2003)
- (5) 『日本語中級J3 0 1—基礎から中級へ—
英語版』
土岐哲、関正昭、平高史也、新内康子、鶴尾
能子 スリーエーネットワーク (1995 ; 2001)
- (6) 『日本語中級J5 0 1—中級から上級へ—
英語版 (改訂版)』
土岐哲、関正昭、平高史也、新内康子、石沢
弘子 スリーエーネットワーク (1999 ; 2001)
- (7) 『中級から上級への日本語』
鎌田修、梶本総子、富山佳子、宮谷敦美、山
本真知子 (1998) Japan Times
- (8) 『国境を越えて 本文編』
山本富美子 編著 (2001) 新曜社
- (9) 『ニューアプローチ 中級日本語 基礎編
改訂版』
日本語研究社教材開発室 小柳昇 (2002 ;
2003)
- (10) 『ニューアプローチ 中上級日本語 完
成編』
日本語研究社教材開発室 小柳昇・岩井理子
(2002 ; 2003)

3-2 分析項目

本稿では、以下の点において、中上級日本語教科書の分析を行った。

(1) 教科書の構成

「読む」・「書く」・「聞く」・「話す」の四技能の育成を目指した中上級レベルの総合型日本語教科書において、それぞれの教科書の構成に注目し、各技能がどのように配置されているのか、とりわけ口頭表現活動はどのように位置づけられているのかについて分析を行った。

(2) 口頭表現活動の種類・内容・実施方法

今回対象とした10冊の教科書の中の口頭表現

活動の種類・内容とその実施方法について、以下の点に注目して分析を行った。

① 口頭表現活動の種類

口頭表現活動の分類の仕方は研究者によって異なるが、石田 (1988 ; 2001)、小林 (1998)、高見澤 (2004) における分類と、各教科書における口頭表現活動の記述を参考に、本稿では次のような分類を行った。

I. コントロールされた会話

A) 文型練習

(問題の) 指示に従って、代入練習、転換練習、応答練習、拡大練習等を行う口頭表現活動を文型練習とする。

II. 自由会話

一定の文型にこだわらず、学習者が自分の言いたいことを自由に話す口頭表現活動を自由会話とする。

自由会話はその内容と実施方法により、下位分類を設けた。

A) 自由選択練習

一定のコミュニケーション形式や談話形式にこだわらず、活動に参加する参加者とのインフォメーションギャップを利用し、学習者が自分の言いたいことを自由に話す口頭表現活動を自由に話す口頭表現活動を自由選択練習とする。自由選択練習は、北條 (1989 ; 1994) を参考に、会話の内容や会話の参加者 (構成員) によって更に下位分類した。

(a)説明する : 話し手が一人または多数の人数に向かって、昔話、童話、幼児の自己体験、自己紹介、人物や物、場所についての描写や紹介、地図の説明、物の使用法など、説明的要素の強い内容について話す活動とする。

- (b)意見を述べる：話し手が一人または多数の人数に向かって、物や事柄についての比較、宣伝、選挙演説、応援演説のように話し手の意見を強く押し出す内容について話す活動とする。
- (c)話し合う：少人数のグループやクラスなどの単位で、複数の参加者が互いに意見を交換する活動とする。
- (d)要約する：話し手が一人または多数の人数に向かって、ある情報源の内容を簡潔にまとめて伝える活動とする。

B) 談話練習

一定の談話形式に従って、学習者が自分の言いたいことを自由に話す口頭表現活動を談話練習とする。談話練習は、その形式によって、以下のように下位分類した。

- (e)発表・スピーチ：発表・スピーチを行う

活動とする。

C) コミュニケーション練習

一定のコミュニケーション形式に従って、学習者が自分の言いたいことを自由に話す口頭表現活動を談話練習とする。コミュニケーション練習は、その形式によって、以下のように下位分類した。

- (f)ロールプレイ：ロールプレイを行う活動とする。
- (g)アンケート：アンケート調査を行う活動とする。
- (h)インタビュー：インタビュー調査を行う活動とする。
- (i)座談会：座談会を行う活動とする。
- (j)ディベート（討論会）：ディベート（討論会）を行う活動とする。

【表1 口頭表現活動の種類】

I. コントロールされた会話	A) 文型練習	
II. 自由会話	A) 自由選択練習	(a)説明する (b)意見を述べる (c)話し合う
	B) 談話練習	(d)要約する (e)発表・スピーチ
	C) コミュニケーション練習	(f)ロールプレイ (g)アンケート (h)インタビュー (i)座談会 (j)ディベート（討論会）

4. 結果と考察

採用されている箇所を示す。(紙面の都合により、教科書名は略称を用いている⁵⁾。)

4-1 教科書の構成

今回調査を行った教科書の構成は以下の通りである。■は自由会話、□は文型練習が

【表2 中上級日本語教科書の構成】

書名	(1) 『テーマ別中級』	(2) 『テーマ別上級』	(3) 『文化中級Ⅰ』	(4) 『文化中級Ⅱ』	(5) 『J301』
構成	①新しいことば ②いっしょに考えましょう ③本文 ④答えましょう ⑤使いましょう ⑥まとめましょう ⑦話しましょう ⑧書きましょう	①ニュースを聞きましょう ②本文新語導入 ③本文読解 ④答えましょう ⑤使いましょう ⑥聞きましょう	①動機づけ ②本文 ③本文質問 ④文型 ④表現・語句 ⑤練習 ⑥技能 聴解・読解・作文・発話・活動 ⑦接続詞・副詞	①動機づけ ②本文 ③本文質問 ④文型・表現 ⑤聞く練習 ⑥接続詞・副詞 ⑦コラム ⑧技能 活動 作文 聴解	①読むまえに ②本文 ③文章の型 ④Q&A ⑤文法ノート・練習・ことばのネットワーク ⑥書いてみよう ⑦話し合ってみよう
書名	(6) 『J501』	(7) 『中級から上級』	(8) 『国境』	(9) 『N.A.中級』	(10) 『N.A.中上級』
構成	①読むまえに ②本文 ③文章の型 ④Q&A ⑤文法ノート ⑥練習A ⑦練習B ⑧ことばのネットワーク ⑨書いてみよう ⑩話してみよう	①読む前に ②読んでみよう ③内容を確認しよう ④意見を述べよう ⑤読んだあとで ⑥重要表現 ⑦文法・語彙練習	①本文1 文語読解 ②本文2 口語読解 ③展開問題 ④聞く練習 ⑤タスク 文 章・口頭表現練習	①本文 ②本文設問 ③本文新出語 ④単語の意味の確認 ⑤文型・表現 ⑥文型・表現の練習 ⑦作文練習 ⑧関連語の学習 ⑨聴解ミニテスト ⑩会話・文型表現 ⑪長文読解練習	①本文を読む前に ②本文 ③本文設問 ④本文新出語 ⑤単語の意味の確認 ⑥文型・表現の練習 ⑦発展(話し合い/作文) ⑧関連語の学習・単語のまとめ ⑨聞き取り練習 ⑩会話・文型表現 ⑪長文読解練習

今回調査した中上級教科書は、読解教材が学習する課の中心に位置付けられていることがわかる。読解教材の前にはその課の学習の動機づけとなる活動、新語の導入が行われ、その後には読解教材の内容確認の質問、読解教材の中の文型・表現の解説・練習問題、課のまとめとなる活動が配されている。

このような構成の中で、口頭表現活動が多く出現しているのは、学習する課の冒頭部分の動機づけの役割を担っている箇所であり、「いっしょに考えましょう」「動機づけ」「本文を読む前に」などという位置づけで、今回調査した教科書10冊中、7冊中がこの形式をとっていた〈教科書(1)、(3)、(4)、(5)、(6)、(7)、(10)〉。その活動内容は、文型や談話の形式にこだわらず、学習者に自由な形式で意見を述べる活動や話し合い、また読解教材と関係する学習者の経験を説明させるなど、すべて自由会話形式が採用されていた。

冒頭部分と同様に口頭表現活動の出現頻度が高かったのは、学習する課の後半部分に現れる学習内容を総合的に運用する役割を担っている箇所である。「話しましょう」「活動」「タスク」「発展」という位置づけで、今回調査した教科書10冊中、7冊中がこの形式をとっていた〈教科書(1)、(3)、(4)、(5)、(6)、(8)、(10)〉。活動の内容は、冒頭部分と同様に自由会話形式が中心であったが、教科書(3)、(4)のように、最初に文型練習をした後に自由会話形式に移行するという二段階構成を採用している教科書も見られた。

その他では、読解教材の理解を確認する役割を担う箇所に口頭表現活動が採用されているものも、10冊中5冊に見られた〈教科書(1)、(2)、(3)、(4)、(7)〉。活動内容は読解教材内容に対する意見を述べることを中心に、すべて自由会話形式となっている。

また今までの点と関係して、口頭表現活動は、

1つの課の中で冒頭部分と後半部分、読解教材の前後など、複数の箇所で開催されている例が多いが、中には教科書(2)、(9)のように、1箇所に限定されているものもあった。

今回調査した教科書における口頭表現活動の活動形式は自由会話形式が多いが、学習項目となっている文型・表現を定着させることを目的に、口頭による文型練習を採用している教科書も10冊中3冊に見られた〈教科書(3)、(5)、(6)〉。文型練習は、一般に筆記による空所補充形式で、空欄に適当な表現を書き入れる形式のものであるが、今回調査したすべての教科書に採用されていた⁹⁾。しかしこの中でも、教科書(3)の場合は「絵を見て言ってみましょう」、教科書(5)、(6)の場合は「例のように書きましょう、そして話しましょう」のように、「話す」ことに対する明確な指示があることが他の教科書とは異なっており、教科書編集者の強い口頭表現練習に対する強い意図が感じられる。

4-2 口頭表現活動の種類・内容・実施方法

次に、今回調査した教科書において、具体的などのような口頭表現活動が採用されていたのかについて、種類・内容・実施方法の点から考察する。

各教科書の中で、3-2で分類した口頭表現活動がどのように分布しているのかについて【表3】にまとめた。

まず今回調査した教科書全体に共通する特徴は、(a)説明する、(b)意見を述べる、(c)話し合う、という自由選択練習が多いことである。これらは全ての教科書に採用されていた。これらの活動は様々な学習項目の中に含まれているが、特に全ての教科書において課の冒頭に位置する「動機づけ」を担う箇所で(b)意見を述べる活動を採用している点は興味深い。それに対し、(c)話し合う活動は課の後半部で、読解活

動が終わったあとや、学習内容を総合的に用いる活動の中で採用される傾向が強いといえる。一方、自由選択練習の中でも、(d)要約する活動を口頭表現活動として採用しているのは教科書(2)『テーマ別上級で学ぶ日本語』のみであった。これは、要約するという活動は思考を要する活動であるため、即興性の高い口頭表現活動にはなじみにくいためだと思われる⁷⁾。

II-Bのように一定の談話形式に従って、学習者が自分の言いたいこと表現する(e)発表・スピーチや、II-Cのように一定のコミュニケーション形式に従って活動する(f)ロールプレイ、(g)アンケート、(h)インタビュー、(i)座談会、(j)ディベートについては、教科書によって採用の傾向に大きな差がみられた。その中でも(e)発表・スピーチは10冊中6冊(教科書(3)、(4)、(6)、(7)、(8)、(9))に採用され、比較的共通性の高い活動といえるが、その他(f)

ロールプレイ、(g)アンケート、(h)インタビュー、(i)座談会、(j)ディベートを採用している教科書は1~2冊にとどまり、その活動を採用するか否かは教科書編集者の編集方針に左右されていると言えそうである。

今回対象とした教科書の中で最も口頭表現活動の種類が豊富だったのは、教科書(4)『文化中級日本語II』、(8)『国境を越えて』であり、次いで(6)『中級から上級への日本語』であった。本学の日本語教育部門では、中級レベルの「日本語3クラス」で教科書(4)を、中上級レベルの「日本語2クラス」で教科書(6)を採用している。これらの教材は、他大学でも多く採用されているが、様々な口頭表現技術を学ぶ必要性の高く、かつ時間的にもある程度余裕がある大学生を対象とした日本語教育にこのような教科書が適しているといえるだろう。

【表3 中上級日本語教科書における口頭表現活動の種類】

教科書	口頭表現活動の種類 学習項目	I	II-A				II-B	II-C				
		(A) 文型練習	(a) 説明する	(b) 意見を述べる	(c) 話し合う	(d) 要約する	(e) 発表・スピーチ	(f) ロールプレイ	(g) アンケート	(h) インタビュー	(i) 座談会	(j) 討論・ディベート
(1)	②考えましょう	—	○	○	—	—	—	—	—	—	—	—
	④答えましょう	—	○	○	—	—	—	—	—	—	—	—
	⑦話しましょう	—	○	○	○	—	—	—	—	—	—	—
(2)	④答えましょう	—	○	○	—	○	—	—	—	—	—	—
(3)	①動機づけ	—	○	○	○	—	—	—	—	—	—	—
	③本文質問	—	○	○	○	—	—	—	—	—	—	—
	⑤練習	○	○	—	—	—	—	○	—	—	—	—
	⑥技能	○	○	○	○	—	○	—	—	—	—	—
(4)	①動機づけ	—	○	○	○	—	—	—	—	—	—	—
	③本文質問	—	○	○	○	—	—	—	—	—	—	—
	⑧技能	○	○	○	○	—	○	○	—	○	—	○
(5)	①読む前に	—	○	○	○	—	—	—	—	—	—	—
	⑤練習	○	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	⑥書いてみよう	—	—	—	○	—	—	—	—	—	—	—
	⑦話し合ってみよう	○	○	○	○	—	—	—	—	—	—	—
(6)	①読む前に	—	○	○	○	—	—	—	—	—	—	—
	⑥練習A	○	○	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	⑩話してみよう	○	○	○	○	—	○	—	—	—	—	—
(7)	①読む前に	—	○	○	○	—	—	—	—	—	—	—
	④意見を述べよう	—	—	○	—	—	—	—	—	—	—	—
	⑤読んだあとで	—	○	○	○	—	○	—	○	○	—	—
(8)	③展開問題	—	○	○	○	—	○	—	—	—	—	—
	⑤タスク	—	○	○	○	—	○	—	○	○	○	○
(9)	⑩長文読解練習	—	○	○	○	—	—	—	—	—	—	—
(10)	①本文を読む前に	—	—	○	○	—	—	—	—	—	—	—
	⑦発展	—	○	○	○	—	—	—	—	—	—	—
	⑩長文読解練習	—	—	○	○	—	—	—	—	—	—	—

5. まとめと今後の課題

本稿では、10冊の中上級日本語教科書を対象に、口頭表現活動の扱われ方について考察を行った。

教科書の構成を見ると、口頭表現活動は、①学習する課や読解活動の「動機づけ」として学習する課の冒頭部におかれる傾向があること、②学習項目を用いた総合的な活動として学習する課の後半部におかれる傾向があることを確認した。口頭表現活動の種類については、①(a)説明する、(b)意見を述べる、(c)話し合う、という自由選択練習については全教科書で共通して採用されているが、②(e)発表・スピーチといった一定の談話形式を学ぶ活動や、(f)ロールプレイ、(g)アンケート、(h)インタビューといった、一定のコミュニケーション形式に従って行う活動には、教科書によって採用に差がみられることを確認した。

以上のことから、中上級レベルの日本語教育上の問題点として、次ようなことが考えられる。

自分で説明する、意見を述べる、口頭表現能力については、概ねどの中上級レベルの日本語教科書の学習活動を通じて一定の学習機会を確保でき、その力を養うことができるであろう。ただし、一定の形式に従ってスピーチをする、発表するといった談話の型に関する学習は行われていないことが多いことから、発表・スピーチといった技能が必要な学習者に対しては、別途の学習の教材や機会を設けて教育を行う必要性がある考えられる。

また、説明する、意見を述べるという活動は、話し手の独話に近いものであり、聞き手の反応によって対応を考えたり、聞き手に応じた待遇表現を運用する、といったコミュニケーションの相手を想定した学習には十分になっていない。したがって、多くの中上級日本語教科書にはそのような実際のコミュニケーションを想定した

学習が不足しているということができるとであろう。中上級者の学習者は自分の言いたいことは一方的に話せても、他者と実質的なコミュニケーションを行うことへの困難さを訴えるものも少なくないが、これには中上級日本語教科書の構成上の問題が影響している可能性が大きいと考える。中上級レベルの日本語教科書の選択にあたっては、学習者のコミュニケーション上のゴールはどこかによって、適切な教材を見極めることが重要であると思われる。

今回の調査は、総合型日本語教材のごく一部を対象としたものであった。今後は更に調査範囲を広げ、中上級教科書のデータの蓄積を積み上げていきたいと考えている。また総合型教材のほか、中上級学習者を対象とした、口頭表現能力育成のための技能別教材も近年多く出版されている。今後は、技能別教材についても調査を行い、総合型教材との比較分析を行いながら、中上級日本語教育における学習活動の全体像を明らかにするとともに、教師が学習目的や学習者にニーズに応じて適切な教材を選択できるよう、学習活動のデータベース構築を検討している。口頭表現能力の育成を中心に、よりよい中上級日本語学習者のための教育方法を継続して考えていきたい。

【日本語教科書】

- (1) 『テーマ別 中級から学ぶ日本語 (改訂版)』
荒井礼子、太田純子、亀田美保、木川和子、桑原直子、長田龍典、松田浩志 (1991 ; 2003) 研究社
- (2) 『上級で学ぶ日本語』
阿部祐子、大藪直子、亀田美保、田口紀子、長田龍典、古家淳、松田浩志 (1994 ; 2001) 研究社
- (3) 『文化中級日本語 I』文化外国語専門学校日本語課程著作・編集 (1994 ; 2003)
- (4) 『文化中級日本語 II』
文化外国語専門学校日本語課程著作・編集 (1997 ;

2003)

- (5) 『日本語中級J3 0 1—基礎から中級へ— 英語版』
土岐哲、関正昭、平高史也、新内康子、鶴尾能子
スリーエーネットワーク (1995 ; 2001)
- (6) 『日本語中級J5 0 1—中級から上級へ— 英語版 (改訂版)』
土岐哲、関正昭、平高史也、新内康子、石沢弘子
スリーエーネットワーク (1999 ; 2001)
- (7) 『中級から上級への日本語』
鎌田修、梶本総子、富山佳子、宮谷敦美、山本真知子 (1998) Japan Times
- (8) 『国境を越えて 本文編』
山本富美子 編著 (2001) 新曜社
- (9) 『ニューアプローチ 中級日本語 基礎編 改訂版』
日本語研究社教材開発室 小柳昇 (2002 ; 2003)
- (10) 『ニューアプローチ 中上級日本語 完成編』
日本語研究社教材開発室 小柳昇・岩井理子
(2002 ; 2003)

【関連教材】

- 阿部祐子、大藪直子、亀田美保、田口典子、長田龍典、古家淳、松田浩志 (1995)
『上級で学ぶ日本語ワークブック』研究社
- 松田浩志 (1991) 『中級から学ぶ日本語—テーマ別 (ワークブック)』研究社
- 土岐哲、関正昭、平高史也、新内康子、鶴尾能子
山本富美子、工藤嘉名子 (2001) 『国境を越えて 文型・表現練習編—文科系留学生のための中・上級学術日本語練習ノート』 新曜社
- 土岐哲、関正昭、平高史也、新内康子、鶴尾能子
(1995 : 2001) 『日本語中級J3 0 1—基礎から中級へ— 教師用マニュアル』

【参考図書・論文】

- 石田敏子 (1988 ; 2001) 『改訂新版 日本語教授法』
大修館書店
- 河原崎幹夫 (1997) 「日本語教科書」『日本語教育』
94号 日本語教育学会 115-122頁
- 河原崎幹夫、吉川武時、吉岡英幸共編著 (1992)
『日本語教材概説』北星堂書店
- 北條淳子 (1989 ; 1994) 「第3章 7節 中、上級の指導法」『日本語教授法』おうふう 175-198頁
- 木村宗男 (1982 ; 1997) 「中級レベルの学習目標」
日本語教育学会編 『日本語教育事典』 大修館書店 633-634頁
- 小林ミナ (1998) 『よくわかる教授法』アルク
- 牧野成一、中島和子、山内 博之、荻原雅佳子、池崎美代子、鎌田修、斉藤 真理子、伊藤とく美
(2001) 『ACTFL - OPI入門—日本語学習者の「話す力」を客観的に測る』アルク
- 牧野成一監修 (1999) 『ACTFL - OPI試験官養成マニュアル (1999年改訂版)』アルク
- 日本語教育学会 (1986) 『日本語教育 [特集] 教科書の問題—理想と現実—』59号
- 岡崎敏雄 (1989) 『日本語教育の教材 分析・使用・作成』 アルク
- 小野正樹 (1997) 「初級日本語教科書の情報提供場面にに関する分析」『日本語教育』92号 日本語教育学会 72-83頁
- ピッツィコーニ、バルバラ (1997) 『待遇表現から見た日本語教科書—初級教科書五種の分析と批判—』くろしお出版
- ラオハブラナキット、カノックワン (1995) 「日本語における「断り」—日本語教科書と実際の会話との比較—」『日本語教育』87号 日本語教育学会 25-39頁
- 高見澤孟 (2004) 『新・はじめての日本語教育 2 日本語教授法入門』アスク

- 1) 2004年度秋学期に、「日本語2クラス」の学生25名に対して実施した。

2) ACTFL-OPIの判定基準

超級：意見の裏づけができる、仮説がたてられる。
具体的な話題も抽象的な話題も議論できる。
言語的にも不慣れな状況に対応できる。

上級：主な時制／アスペクトを使って叙述、描写
できる。複雑な状況に対応できる。

中級：自分なりに言語が使える、よく知っている
話題について簡単な質問をしたり答えたり
できる。単純な状況や、やりとりに対処で
きる。

初級：コミュニケーションができるのは、決まり
文句、暗記した語句、単語の羅列、簡単な
熟語のみ。

(牧野2001ほか『ACTFL - OPI入門—日本語学習
者の「話す力」を客観的に測る』より)

3) 九州日本語教育連絡協議会・会報編集部 (2003)

「2-①九州・沖縄の日本語教育の現状」

『九州日本語教育連絡協議会 会報』29号

4) 日本語教育機関使用主教材・書籍リスト (2004
年8月10日現在)

<http://www1.odn.ne.jp/~aal93910/tekisuto%20risuto.htm>

(有) 大谷書店作成

5) 『テーマ別中級』 ; 『テーマ別 中級から学ぶ
日本語 (改訂版)』

『テーマ別上級』 ; 『上級で学ぶ日本語』

『文化中級Ⅰ』 ; 『文化中級日本語Ⅰ』

『文化中級Ⅱ』 ; 『文化中級日本語Ⅱ』

『J301』 ; 『日本語中級J301—基礎
から中級へ— 英語版』

『J501』 ; 『日本語中級J501—中級
から上級へ— 英語版 (改
訂版)』

『中級から上級』 ; 『中級から上級への日本語』

『国境』 ; 『国境を越えて 本文編』

『N.A. 中級』 ; 『ニューアプローチ 中級

日本語 基礎編 改訂版』

『N.A. 中上級』 ; 『ニューアプローチ 中上
級日本語 完成編』

6) 『国境を越えて』は別冊『国境を越えて[文型・
表現練習編]』に文型練習がまとめられている。

7) 教科書(1)『テーマ別中級から学ぶ日本語』
にも「まとめましょう」という学習項目で要約文
を作る活動もみられたが、これは既に作成されて
いる要約文の空所を補充する形式になっていたた
め、話す活動というより、むしろ書く活動と判断
し、今回の分析からは除いた。

E-mail : okabe@tc.nagasaki-gaigo.ac.jp